

II
女性と短歌



女性の短歌から見た昭和と戦争

プロローグ

平成も九年となったが、まだなんとなくこの呼び名に馴染みがない。一九三〇(昭和五)年生まれの私は、年号を西暦で言うことを常としていたが、六十年生きてきた「昭和」は、しつかりと心の中にも身体の中にもしみ込んでいることをつくづく感じる。

一昨年、戦時中の日記をもとにして「軍国少女の日記」(カタログハウス)を出版した折、勤労働員の日々に多くの級友が短歌を詠んでいたことを知り、いずれ短歌に表れた戦争というものをまとめてみたいと思った。

この度、サキクサ誌の貴重な一頁を戴いてそのテーマをさらに拡げて「女性の短歌から見た昭和と戦争」としたが、さて書く段になってみると「大それたことを始めようとしている」ことを思い知った。

第一に、戦争の短歌は実に多い。戦前にも詠まれているが、戦争の激しくなった頃には紙がなく「アララギ」他の雑誌は廃刊、戦意高揚一色となった新聞の歌壇は廃止されてい

る。しかし、戦争の短歌はむしろ戦後になって多くの人々、特に女性によって歌われ、五十年を経てもまだ夥しい数で歌い継がれている。第二に、短歌を戦争だけにしぼると、戦前の歌は、男性より女性のほうが少ない。

あれやこれや考えていると、一向に手がつけられないので、先ずは女性の短歌に「昭和」の庶民の生活がどう表れているかを探ってみようと思う。短歌の専門誌だけでなく、一般の女性誌や新聞の投稿欄に寄せられた女性の短歌から、昭和の女性たちの生活や哀歎を読み取ることができたらと思うのである。

服喪で迎えた昭和二年の正月

わずか数日で終わった昭和元年を終え、昭和二年の正月は大正天皇の服喪のうちに始まった。元号の「昭和」は『書経・堯典』の「百姓昭明 協和萬邦」からとられた一節で、「明るい生活と世界平和の祈り」がこめられていた。しかし、その願いととは反対に「昭和」は急速に戦争への道を進んで行く。

昭和二年の一月から二月の新聞を調べてみると、明治四十三年石川啄木を選者として創設された朝日新聞の歌壇はこの前後数年中断されており、読売新聞は月に二回ほど若山牧水選の日と九條武子選の日があった。しかし、いずれも十数首の掲載で現在に比べればま

ことに小さい欄である。若山牧水の欄は主として男性が、九條武子選の欄には「婦人短歌」と銘打ってあり、女性の短歌が掲載されている。また「主婦之友」は短歌投稿欄のタイトルが「家庭の歌」となっており、若山牧水が選者ではあるが、テーマを生活のことに限定している。一方「婦人倶楽部」は與謝野晶子が選者で、自然詠あり恋の歌あり自由闊達な短歌が見られた。ご大葬が行なわれ、生活の中に服喪の様子が伺い知れる。

かなしみのみ旗か、げて家内に言葉すくなく母と向きあふ

東京府 瀨下倭文子 「読売新聞」 2・2・9 九條武子選

改元は昭和となりて枇杷の花ひらく歳暮を諒間りやうあんに従く

清水ちとせ 「凍み音」(45) 「昭和萬葉集巻一」(55)

誠もてわが言ひ解けば漸くに夫の気色に和らぎの見ゆ

岡山県 中村みどり 「主婦之友」 2・3 若山牧水選

山深し日は失せながら白き雲空に光りて淋しかりけれ

大阪 川崎紀久子 「婦人倶楽部」 2・4 與謝野晶子選

(注) 新聞は掲載年と掲載月日、単行本は発行年、雑誌は年と掲載月を示す。いずれも昭和は省略。

恐慌で明けた昭和の初期

大正から昭和へと御代は変ったが、昭和の初期は、まず関東大震災の影響による三十七にも及ぶ銀行の休業、浜口雄幸内閣による緊縮財政、そしてアメリカ大恐慌の直撃による株式の大暴落と、厳しい状況が相次いで起こった。このような状況は、企業の倒産、労働者の解雇、失業者の増大、賃金切り下げ、労働争議の多発と、多くの社会問題を引き起こし、庶民の生活は深刻なものとなった。

この時期の男性の短歌には、こうした社会問題を直接に詠ったものが目立ち、女性の短歌からは日々の生活の中でやりくりし、苦労している様子が垣間見られる。

児童等こどもにくれてしまへばあまりなし夕げは食はず我いねにけり

中村美穂 「アララギ」 3・6 「昭和萬葉集巻一」

乏しいおかずも御飯もまず子ども達に食べさせて、残りはほとんどなかつたのであろう。母親はきつと空腹に寝もやらずこの歌を詠んだのかもしれない。母親の気持がよく伝わってくる。

つころはむ術すべもあらずなく子の足袋の底をいく度うちかへし見つ

両角千代子 「アララギ」5・7 「昭和萬葉集巻一」

幼い頃、夜のひととき茶の間で足袋をつくろつていた母の姿が思い出される。針を持つのが苦手な私も戦後間もない頃には止むなく靴下のつくろいをしたことがあった。この短歌からは、つくろう余地もないほどの足袋を見つめている母親のため息が聞こえてくる。

とほしさに慣れし生活たつきのこのごろは葱一銭を買ひて帰るも

平野道子 「橄欖」3・4

不景気の直撃を受けて、食費のきりつめに苦勞する主婦の心情がよく読み取れる。恐らく最初は葱一銭を買うのにも八百屋の前でためらっていたのであろう。しかし、乏しさにも慣れ、やむなく諦めの複雑な気持で、葱一銭を買い求める姿が浮かんでくる。

ひとりゐの心細さやいふがま、に押売りの墨をわれは買ひたり

東京 芦屋くにえ 「主婦の友」2・2 若山牧水選

失業者が増えれば当然何らかの物を売って明日の糧を得なければならぬ人が増える。突然現われ、玄関を動かない押し売りの来訪は、主婦にとつて恐いことであった。わが家では致し方なくゴムひもをよく買っていた。

糸車霜夜あかりにほそぼそと廻してあらん故里の母は

駒澤村 高木みどり 「読売新聞」2・1・5 九條武子選

日本の重要輸出品である生糸はアメリカの恐慌によって打撃をこうむった。一九三〇（昭和五年）年生糸の相場が暴落し、繭の価格は値下がりの一途を辿り、いちばん被害を受けたのは養蚕農家だった。この歌で夜半までほそほそと糸車を廻していた故郷の家も、数年後には糸を繰ることすらできなくなったのではないだろうか。

一九二七（昭和二年）七月二十四日、芥川龍之介の死は大きな衝撃をもたらした。未だ三十五歳で自らの人生を断ってしまったのである。翌年には、若山牧水が四十三歳で、九條武子が四十歳の若さで亡くなっている。

多産多死の時代

大塚主宰からの「どうぞ自由に気楽に」との本欄へのお言葉に甘え、少し寄り道を。

昭和初期の「主婦の友」や「婦人倶楽部」を見ると、大正天皇の大喪も明けて、華やかさをとりもどし、グラビアには令嬢達の初春の舞い姿や流行の髪型が紹介されている。お正月にはまだ日本髪を結う女性が多かったが、耳を出す洋髪が流行し始めていた。しかし「あまりあらわに耳を出すのもどうか」という心得も書いてある。昨今の街中でおへそを堂々と出す女性のファッションを思い、隔世の感があった。

また、現在は子どもの数が少なく、一九九五(平成七)年の出生率は一・四三だが、一九三〇(昭和五)年は四・七一、女性は一生に五人近い子どもを出産していた。しかし、乳児の死亡率は高く、せっかく産まれてもきょうだいの内の何人かは死亡していた。私の家でも三人の子のうち一番上の姉が三歳の時に麻疹で亡くなっている。幸い私は元気に育ったが、多産多死の時代だったのである。

やうやくに洗ひ終へたる干物の六竿にあまる朝あらしかな

朝鮮 小宮みえ子 「主婦の友」5・10 太田水穂選

六竿にあまる洗濯物、おむつや産着、やんちゃ坊主の肌着などが青空にはためいている様は、まさに壮観であつたろう。この短歌は一等で賞金十円とある。当時の給与は職種や学歴によつて大變な差があるが、民間企業では八十〜九十円、小学校教員六十二円、巡査四十〜四十五円、しかも浜口内閣は緊縮財政のために官吏の俸給の一割減額を閣議で決めるという時代だったので、思わぬ賞金に作者はどんなに喜んだであろうか。

小鳥来て唄ふ裏庭の陽あたりに盥を据ゑてもの洗ひをり

京都 廣町三々子 「主婦の友」5・6 太田水穂選

朝井汲む釣瓶の竿のさきふれて石にこぼるる白萩の露

埼玉 神田ユリ子 「主婦の友」5・10 太田水穂選

盥での洗濯も水汲みも庭に出ることが多かったその頃、春や秋など気候のよい時はよいとしても、霰や雪の降りしきる頃はどんなに辛いことであつたらうか。

一方、乳幼児死亡率の高い時期であつたために、わが子を亡くす人は多く、悲しみの歌は胸を衝く。

張り来る乳をしほりてこの朝仏となりし吾子に手向くる

芝田文子 「国民文学」3・4 「昭和萬葉集巻二」

頬ずりも今は限りと抱き上げて命なき児にもいふわれは

奥村さき 「石をかむ」 「昭和萬葉集巻二」

霜どけの庭に筵を敷きつつふとままごとをせし亡き吾子思ふ

千葉 斉藤喜久子 「主婦之友」5・4 若山喜志子選

若山牧水が亡くなったため「主婦之友」の選者が若山喜志子に変わり、その後太田水穂に変わっている。前号で九條武子の死を伝えたが、原因は抜歯がもとでの敗血症のためという。現在のように抗生物質があれば命を落とさずにすんだであろうに。美人薄命というが、医療の発達した現在は美人も長命、ただし、美しく長命を全うすることもまた難しい時代である。

恐慌の痛手を最も受けた養蚕農家

日本の生糸と繭の価格は、一九二九(昭和四)年のニューヨーク株の大暴落の直撃を受け、みるみる下落した。農家約五六〇万戸の内二二〇万戸も占める養蚕農家は多大な影響をこうむつた。

真夜中の桑やり終へてうつつなき耳にきこゆるは蛙かはづの声か

福岡 田中さち穂 「主婦の友」5・6 (若山喜志子選で三等)

夕餉すと児等坐らする縁側の障子にうつる蚕棚おこなの影

愛知 可合千代子 「主婦の友」5・9 若山喜志子選

養蚕は現金収入になるために多くの農家では所狭しと蚕棚を作り、子は隅に追いやられ、病人は倉に、仏壇すら押入にしまつて、蚕室にあてなくてはならないのだった。

娘も嫁も姑も夜明けまで蚕の世話に身を細らせていた。蚕室にこもりっきりの立ち仕事に足もむくみ、夜もすがら糸をとる妻を哀れんで詠んだ夫の短歌もある。冒頭の短歌についての選者の評にも「下旬疲労の心が生かしてあります」とある。農家の家族は一家を挙げて養蚕の作業にあたっていたが、特に女性は家事、育児に加え、寝もやらず疲労の日々

を送っていたことであろう。

糸を採る繭煮るにほひ家のうちにほのかにこもる雨の降る日は

芹沢千枝子 「報知新聞」 11・11・10

繭を煮る匂いがほのかに立ちこもる程度であればよいが、秋蚕があがる日が近づけば部屋中に蚕の糞の蒸れた匂いが満ちた。その匂いはたまらないものではなかっただろうか。その中で大家族の食事を作り、自らも食べなければならぬつわりの頃の妊婦が思いやられる。

露の葉に小雨そほ降る裏畑にすてられし蚕のよりそひ動く

坂本住枝 「心の花」 4・10 「昭和萬葉集巻一」

繭を作る直前の蚕の桑を喰べる音はすさまじく、大雨が降るようだと聞く。しかし、蚕にやる桑がなくて蚕をみすみす捨ててはならないこともあれば、高い桑を買って食べさせたのにたくさん蚕が死んでしまったという番狂わせもある。ひとときも気を許せない毎日である。

小雨のそほ降る日、作者はどんな気持ちで捨てられた蚕をじっと見つめていたのだろうか。春蚕をひきあてにして田作りの人のあまは米かりて食む

林 静枝 「短歌研究」 8・8 「昭和萬葉集巻二」

繭の価格は下がるばかりで、一九三〇(昭和五)年にはなんと七〇パーセントも値下がりをした。人々は繭の相場放送をラジオのある家に聞きに集まっては肩を落として帰った。そして、この短歌のように春蚕を頼みにして食べるための手段を考えるのだった。

農家の打撃はこれだけではなかった。恐慌の影響を受けて米価が下落し、農民の生活にさらに追い打ちをかけたのである。その結果、やがて娘たちが売られていった。親子のつらい別れもあつたろう。娘の姿は一人減り、二人減り、ついに農村には若い娘の姿が見かけられないほどに少なくなつていったのである。

四季を彩る物売りの声や音

昭和のごく初期の短歌を見てみると、物売りの声を詠っているものが多い。戦争が始まり、だんだんに激しくなり、庶民の生活を根底から覆すようになるまでは、路地を歩きながら物を売る声や音が四季を伝え、風物詩として人々に愛されていた。

例えば、納豆売り、しじみ売り、漬け梅売り、夏に欠かせない金魚売りの声と涼しげな風鈴売りの音、虫売り、玄米パン売りの声、そして、キセルを新しいものにすげ替えるピーツという羅宇屋の笛の音、竹棹売り、などはお馴染みである。桃や葡萄など季節の果物

もよく売りにきた。

この他にも毒消し売り、寒中にベニバナの花弁に含まれた顔料で作られた寒紅売り、辻占売りの拍子木の音などが挙げられていた。地方によれば、もつと地方色豊かな物売りの声が季節の到来を告げていたことであろう。

つく羽根の音ものどかに響きつつこの元旦のうららけきかな

山梨 望月みどり 『主婦之友』5・1 (若山喜志子選一等)

お正月は、子どもや家族が打ち興じる羽根つきの音に始まり、笛や太鼓に合わせて門先で踊る角兵衛獅子に心付けをあげたりしたことが思い出される。最近では羽根つきの音もとんと聞こえない。

飴売りの鉦響きたりをちこちの路地より子等のあまた出で来し

井上 つや 『毎日新聞』5・8・10

塀越しに聞こえてくるは三勇士の今しも進む紙芝居の声

室伏 寿美 『歌と観照』8・7 『昭和萬葉集巻二』

紙芝居が始まる知らせに子ども達の胸はわくわくする。飴を買うお金がなくて、遠くからそつと覗き見をしていた子もあったことだろう。しかし、この紙芝居の題材も一九三一年満州事変勃発の頃には、肉弾三勇士が登場している。

豆腐屋の鈴鳴りて来ぬ襖ごしにのぞけば吾子はよく眠りをり

兵庫 井上つや 「主婦之友」2・2 (若山牧水選二等)

評のことばに「即興だが、歌はれたものが、みな生きてをる。鈴も子供の眠りも作者の心も」とある。作者の井上つやさんは前掲の毎日新聞にも投稿している。投稿歌が採用されての喜びを胸に、牧水の評をくり返しくり返し読んでいる姿が目に浮かんでくる。

外から聞こえてくる音は、焼き芋売りも竹棹売りも、ラウドスピーカーになってしまった。お蕎麦屋さんの配達もバイクなら、郵便配達もバイクである。

「サキクサ」誌の短歌から現代の生活の中での音を――一見してみよう。

オートバイの音遠さかるを床にあきやをあら朝あの厨あ辺あに立あつ

高橋 紀子 「サキクサ」平成9・5

次の歌は昨年の湘南歌会で第四位に入つた作品である。鈴虫も兜虫も高価で買う時代となつてしまつたが、いかにも現代の生活の一端を表していて、微笑ましくすらある。

下町の信用金庫の配りくれし鈴虫そちこちの家々に鳴く

西川静枝 サキクサ湘南歌会、平成八年八月四日

戦争への幕開けと冬の時代へ

一九三一（昭和六）年九月十八日満州事変の勃発と共に日本は戦争への道をつき進むことになる。戦争が始まれば当然召集があり、庶民の家庭では親子や夫婦の悲しい別れがある。無事に帰還する兵もあれば、遺骨となって無言の帰宅をする兵もある。

この時から一九四五（昭和二十）年八月まで、日本は十五年の長きにわたる戦争を行い、戦争が激しくなるにつれて、召集される数も戦死者の数も膨大になるのだが、一つ一つの別れに変わりはなく、そのどの歌を見ても悲しみの思いは胸をえぐる。

すでに疲れて眠らむとする子をゆすぶりて出征の父の顔見するなり

森戸淑恵 「心の花」 7・5 「昭和萬葉集巻二」

白々と六つの遺骨の降り立ちし若松駅は夕暮れにけり

石川 きよ 「毎日新聞」 7・4・6

一九三三（昭和八）年二月二十日、作家・小林多喜二が逮捕、築地警察署に連行され、その夕刻死亡した。拷問による死であった。通夜や告別式に集まった友人や知人は次々と逮捕されたという。治安維持法違反の名のもとに特高警察による人間の自由な思想への弾圧

は厳しくなり、共産党の非合法化をはじめ、戦争に反対する人達の検挙は日増しに増えていった。

小林多喜二を悼む文よめば削除されてきれぎれなるが腹立たしかり

安倍俊子 「アララギ」 8・9 「昭和萬葉集巻二」

繭値の暴落により、繭を生計の糧にしていた農家の苦しさは（四）に記したが、製糸業も価格が下落し、工場は立ちゆかなくなった。農村から駆りだされ、夜明けまで働かされていた女工さん達は、たちまち解雇された。

製糸場の休み続きに指先の皮薄くして寒さに痛む

五味たけの 「婦人倶楽部」 8・3

休み続きの工場の寮で「いっそ故郷に帰りたい」とは思うものの、農村は米価の大暴落で疲弊そのものであった。痛む指先を見つめながら作者の思いは複雑であったろう。

その貧困そのものの田舎へ、都会の失業者が群れをなして帰郷していった。東京朝日新聞は、旅費もなく東海道を歩いていく失業者に「藤沢の遊行寺で麦飯をどんぶり一杯つつ恵んでいる」と報道している（昭和五年）。

職のなきルンペンの群立ちちゐたり雪もよひせる日ガードの下に

桑本ちゑ子 「読売新聞」 7・1・28

いたづらに聞き過したる失業の今は我家におそひ来りし

赤井八重子 「アララギ」 6・4

次の短歌は当時の「読売新聞」で「農村」という題での応募作品の一部。失業者を受け入れようもない農村の生活と心情が伺われる。

米価落ち豊年に泣くふるさとの父のたよりはかなしかりけり 玉井さだ子

この生活この村いやだブラジルへ行くと争ふ兄と父とは みどり

野良みちは面を伏せていそぎゆくわれは地主の娘なりけり 美恵

日給の六十銭をこぼしつつまだ朝明けを父は出て行く 村田 みわ

以上 「読売新聞」 6・1・19

離婚できずに堪えしのぶ妻の姿

昭和の初期の新聞や雑誌の女性の短歌を見ていると、暁方まで帰らぬ夫を待って、ひたすら耐えている女性の姿が浮かんでくる。

疑ひの心打ち消し打ち消して早や十二時を淋しく聞きぬ

静岡 大橋 テル 「主婦之友」 5・4

全身が耳になりけり雪の夜に火鉢かかへてひとり居るとき
雪の夜にこみ上て来る淋しさに火を赤々とつぎたしにけり

長野 菊 「読売新聞」 6・1・5

夜もすがら待ちつくしたるわびしさよ夫は帰らで暁となる

「読売新聞」 6・1・15

ちやぶ台の上には夫の夕飯が用意され、妻も食べずに夫の帰りを待っていたのであろう。夜の更けるにつれてしんしんと寒さがつのる。小さな火鉢に火をつぎたしつつ、渦巻く胸の悩みを吐き出しようもない妻たちの姿がここにある。

また、夫にいろいろ言いたいことはあっても面と向かうととても言えない。次の歌はその妻の気持をよく表わしている。

返すべき言葉はあれど黙しをりまたたかば落ちむ涙たへつつ

佐賀 石井千香 「主婦之友」 5・12

挿絵には、丸鬚を結った妻がこわそうな顔をしてでんと座っている夫の前で、よよと泣き崩れている姿が描いてある。

明治に作られた民法が施行されていた当時、この民法では、家庭生活の円満を図るために、妻を未成年者や準禁治産者などと並べて、無能力者としていた。そのために妻は夫の

許可がなくては自分の財産を処分することも、利用することもできなかつた（旧十四条ないし十八条一二〇条二項）。

また、厳然たる家制度の下で、女性は嫁いだら二度と実家に戻れないという觀念に縛られていた。その上「三年子なきは去る」といった考えも根強くあり、子どもができない妻は、婚家や夫から一方的に「三下り半」をつきつけられることも多かつたのである。

去り状を前におかれて何となう床の花をば見てありしかな

秋元 ぎん 「心の花」 3・10 「昭和萬葉集卷一」

複雑な気持をさりげなく詠っているが、深い悲しみとやるせなさが伝わってくる。

一九三〇（昭和五）年の離婚件数は五一六八七名、離婚率（人口千対）は〇・八であつた。一九九五年には十九万九千件、離婚率は一・六〇と統計史上最高を示している。

妻を法律上無能力者と取り扱つたかの明治民法は、敗戦時まで生き続けた。しかし、一九四七年に施行された日本国憲法二四条が、婚姻および家族に関する法律は「個人の尊厳と両性の本質的平等」に立脚しなければならぬと宣言し、現在の民法が制定された。これは家制度の下での男女の不平等を根本から揺るがすものであつた。

戦後五十年の間に女性達は自立の方向をめざし、さまざまな価値観を持って生き方を実現してきた。結婚という形にしがみつくより、離婚によつて新たなスタートをする女性達が増えてきたのである。去り状を前に呆然とするのは、今や男性の側かもしれない。

あかぎれの痛さ身にしむ冬

地球の温暖化現象が問題になっている昨今だが、たしかに昔はもっと寒かった。私が子どもの頃、東京ですら菊の咲く十一月の外気は肌を刺すように冷たくピリピリとしていた。家の中も火鉢や炬燵で暖をとり、木造家屋で窓にアルミサッシもない時代であれば隙間風も入りやすい。昭和初期の婦人雑誌短歌欄にあかぎれの痛さを詠うものが目につくのもむべなるかなの感が深い。

物ほしにかけたる吾子の洗物凍りてありぬ棒の如くに

奈良 上村 信枝 「主婦之友」 7・3

困は戸にしづまりてふけにけり衿をおさへて眠らむとする

長野 岩下千代子 「婦人倶楽部」 8・12

冷たい水で盥で洗う洗濯物、脱水機もないから乾きも悪い。干し竿にかけたおむつや衣

類は寒さで凍ってしまふ。凍った洗濯物を炬燵の中にかけてたり、主婦はその後も忙しい。電気毛布もない時代、木枯らしはおさまったものの夜更けと共に加わる寒さ、もめん綿の重い蒲団の中で寝巻の衿をかき寄せている作者。長野からの投稿で、寒さの厳しさがいっそう俣ばれる。

火にかざす我がはらからのもろ手みな^{ひび}痺にし荒れて冬は深めり

福島 加藤ミキ子 「主婦之友」6・1

農家の大家族であろうか。一日の仕事を終えて囲炉裏にかざされた兄弟姉妹の手、ひび荒れたもろ手に農作業の辛さが思いやられる。と、共に何とも言えぬ暖かみが伝わってくる。いとし子のためと思へば手のひびも痛くはなしと言へる母なり

愛媛 恒岡八重子 「主婦之友」7・4

ひび荒れた手には水仕事がつらい。すぐに温水の出でくる今のキッチンとは異なり、氷のような冷たい水に手を入れた時のズキンとした痛みに思わず悲鳴をあげることもあるだろう。当時は紙おむつなどはないから、乳呑み児のいる母親はおむつを何十枚も洗わなければならぬ。その上、子だくさんだから洗濯物は三竿にも四竿にもわたり、その労力は大きかった。全自動洗濯機がやってくれるのではなく、洗濯板で自分でゴシゴシ洗わなければならぬのだから。野菜にしても泥を落とすところからがひと仕事だったから、ひび

のある指には痛いことばかりだった。

さらに、常に土を扱う農作業に従事する女性達の痛さは耐え難いものであったろう。

筵織れば指の赤ぎれにひり／＼と寒さしみとほる土間の朝あけ

富山 市村睦子 「婦人倶楽部」 8・3

昼の農作業と家事育児だけでも大変なのに、夜なべ仕事に筵織りまである。裂けたあかぎれに固い藁などがあたったら、どんなに痛いことだろう。

一九三一（昭和六）年北海道・東北の冷害による凶作、二年後三陸大地震、津波による被害、その翌年は室戸台風、西日本旱害、東北冷害による凶作と、農家は多大な被害を受けていた。人身売買までしなければならぬ窮状の中で、夜なべの筵織りにも精を出さなければならなかったのだ。そして、嫁の入る湯はいつもしまい湯であった。

稲扱きを終へて夜ふけに浸る湯の手足の皸に沁みて痛けれ

島根 玉木より子 「主婦之友」 7・12

改まった気持で迎えていた新年

昭和の初期の頃、私達は今に比べて新年というものをもっと改まった気持で迎えていた

と思う。子どもも父や母の言いつけに従って家の内外を掃き清めたり、お正月の準備の手伝いをし、新年を迎えるということにある種の緊張感を感じていた。貧しい家庭には貧しい家庭なりに精一杯の努力をして新年を迎えていた。次の歌からは苦しい生活の中での母親の苦勞と喜びが伝わってくる。

おしせまる歳晩くわのたつきの苦しさを吾子は知らじな晴衣はれぎをねだる

東京 藤原恒子 「主婦之友」 6・2

みどり子の晴着となれり長襦袢わが初恋の匂ひ漂ふ

京都 徳田喜代子 「主婦之友」 6・1

児等の衣みな新しく着せかへて貧しけれども正月うれし

金沢 棚木 梅子 「主婦之友」 7・1

正月に飾る物は家々によって決まっています、私の家では床の間の掛軸は初日の出、違い棚に置くのは役者絵の大きな羽子板だった。座敷がみるみるお正月に様変わりしていくのを見つつ、子ども達の新年への期待は高まるのだった。次の歌にも新春を迎える喜びが感じられる。

清めたる床に飾りし萬年青葉おもとばの生き生きとして春を待つらん

長野 小林静子 「主婦之友」 6・2

古びたるわが家ながら張りかへし白き障子の冴ゆるうれしさ

熊本 久木田要子 「主婦之友」 6・2

そして、たった一夜明けただけなのに元旦の朝の空気はなんと清々しく感じられたことであろう。また、昨日と同じく昇る太陽であるのに、初日の出は特別なものとして眺められた。次の歌にもその思いがある。

新春の真日まひかがやかにいらか薨いらみな朝に向へり大都の横顔

愛知 吉川 きぬ 「主婦之友」 6・2

祖母に手を与へて出づる裏庭に早や初日の出満ちて明るし

神奈川 久穂 糸 「主婦之友」 7・1

家族揃ってお屠蘇を祝い、子どもは子どもなりに新年の挨拶をする。こうした節目の挨拶も昔はきちつとなされていた。次の歌からはその微笑ましい光景が浮かび上ってくる。

をさなきは稚わかきどちの新玉あらたまの年ほぎ言葉ほほ笑まれぬる

東京 芝野ぶん子 「主婦之友」 6・1

さて、その後はお年玉をいただいて、おせち料理を食べて、羽根つきに凧上げ、福笑いに双六、百人一首にトランプにと、子ども達は楽しく遊んだものだ。親戚との往き来も密

だった。新婚の叔父夫婦も訪ねてきた。

丸鬻の赤き鹿の子の高絞りあてやかにゆく春の新妻

北海道 佐藤 ミキ 「主婦之友」7・3

新婚の叔母も丸鬻を結っていて子ども心にもその美しさに見とれていた思い出がある。

こうした一家揃つての楽しい正月は、戦争の激化と共に失われた。父も叔父も召集され、父はレイテで戦死した。空襲や原爆でどれだけ多くの家族が死別、離散し、悲しい運命を辿ったことか。戦争とは庶民のささやかな願いと幸せを無残に破壊するものなのである。

針仕事

昭和の初めから一九三五(昭和十)年までの日本の状況を見ると、銀行の休業・倒産など金融恐慌、不景気、一般企業の倒産、失業者増大と、その背景は異なっても、まるで現在を見るような気がする。さらに満州事変、五・一五事件、テロの続発、農村の凶作、飢饉、身売り、小林多喜二虐殺、共産党への弾圧と思想統制など、暗く厳しい時代を感じるが、一方ではその反動のためか歓楽の巷は賑わい、エロ・グロ・ナンセンス時代と言われるよ

うな風潮があつた。

また、日本橋の百貨店白木屋で大火があり、和服姿の女子社員が猛火の中を飛び降りて、多数死傷者が出たり、心中や自殺が相次ぎ、大島の三原山への若い女性の投身自殺が三カ月のうちに六十人、未遂百六十人に達するなどの事件があつた。

こうした社会問題を詠んだ短歌はあるが、婦人雑誌や新聞の投稿欄は題が指定されているものもあり、その制約のためか日常的なものに限られている。その中で、寒い季節になると針仕事の歌が目立つ。

子等がための冬の支度に厚子^{あつし}刺し足袋刺し夜も暇なきかな

青森 櫻井キミ 「主婦之友」 7・12

投稿者は青森、そこには厳しい寒さと念入りな冬支度に余念のない作者の姿がある。

酒多く飲む父の身を憂へつつ夜寒さびしく母と衣縫ふ

北海道 山口とみ子 「主婦之友」 7・1

雪の降りしきる夜も、父親はまだ外で酒を飲んでいるのだろうか。父の身を案じつつ針を運ぶ母と子の淋しさが伝わってくる。

田も畑も取り入れ終へてうら安しまたこの冬もお針に通ふ

新潟 棚橋静子 「主婦之友」 7・1

若い作者であろう。農作業も一段落したところで、ほっとした気持ちとお針のお稽古に通う楽しさを詠んでいる。反物やお針道具を風呂敷に包んで胸に抱え、畔道をいそいそと歩いていく姿が浮かんでくる。

秋めきて赤き蜻蛉の群れ飛べり吾子の袷は明日かも縫はん

東京 猪瀬スワ 「婦人倶楽部」 8・10

昔は六月になると単衣（ひとえ）の着物になり、夏には絹やゆかた、十月には袷を着るなどと衣替えの季節がはつきりしていた。この歌を見ると、東京にも赤とんぼの群れが飛んでいたのだなあと思ひ、また、それを見て「子どもの袷を早く縫わなくては」と心急せく母親に感性豊かな季節感を感じる。

あたたかき日影を追ひつつ針仕事朝と午後とに部屋うつりする

滋賀 井関榮子 「主婦之友」 7・3

少しでも暖かい日差しを追いながら縫いかけの反物やへら台やらの一式を運んでいる姿が目には浮かぶ。

最後に、最近の「サキクサ」誌から一首。

針運ぶ母のかたへに幼我何縫ひるしや小裂れ集めて

東京 清水 忍 「サキクサ」平成9・9

「お手玉に寄す」八首中の一首。座敷にひろげられた色とりどりの小裂れの華やかさと共に、針を運ぶ母と幼い日へのなつかしさが胸にジーンと伝わってくる。

満州事変・肉弾三勇士

一九三二(昭和七)年二月二十二日、上海北部の廟行鎮^{びようこうちん}で、中国軍の堅固な鉄条網を爆破するために三人の兵士が破壊筒を持って突撃した。その体当たりの突撃で進路は開かれたが、三人は死亡、その名は「肉弾三勇士」として賞讃され、北原白秋をはじめ歌人も^{こぞ}挙つて若き勇士を讃える短歌を発表している。女性の短歌にも肉弾三勇士のことが散見される。思はずも涙は落ちぬ上海の雄々しき三士の記事を読みあて

東京 橋本 静子 「主婦之友」7・5

その顔を熱と意気とに紅くして少年はうたふ三勇士の歌

大分 古寺ジツ子 「主婦之友」7・9

肉弾三勇士の映画見しならむ園児等はごさをば巻きてそのまねをする

杜みどり 「アララギ」8・6 「昭和萬葉集二」

国中が肉弾三勇士で沸き立っている様子がうかがわれる。また、千人針の風景を詠んだ

短歌も登場している。

出征の孫へ送ると街角に千人縫ひを乞ひをるせむ媼

福島 近藤 文子 「主婦之友」7・2

鄙びたる老母の乞へる弾丸たま除けの一針なれど謹みて縫ふ

大分 後藤 らく 「主婦之友」7・5

妻が夫を、母が子を、妹が兄を姉が弟を恋人が彼をと、それぞれが出征した人をもって千人針を持ち、道行く人に一針を頼んでいた姿を思い出す。前記の短歌からは孫を思う媼の気持が、また老母の乞いに心をこめて一針縫う作者の気持が伝わってくる。

外つ国に戦ひいますその父に寄せ書をするをさな吾子達

東京 渋谷行々子 「主婦之友」8・8

当時はまだ戦地が満州と限定されていたので、子ども達と父親の手紙の通信も可能であった。しかし、日中戦争、太平洋戦争へと戦局が拡大してからは手紙のやりとりが難しくなっていく。その手紙も厳しい軍部の検閲の下に、都合の悪い箇所はすべて黒く塗られ、読めないようになっていた。

出征の夫をおもひて秣切まぐさるうまのすみの昼のこほろぎ

住所不明 清原崎枝子 「主婦之友」7・11

出征の夫のかけ膳我が手にて搗きし草餅を盛りて据ゑたり

長野 丸山 春子 「主婦之友」 8・7

農家の妻であろうか。いずれも戦地にいる夫を思う気持がひしひしと伝わってくる。

満州にいく兵士の列車見て吾子も打振る打振る小旗

山形 高橋喜久子 「主婦之友」 7・2

小学二年生の時に引越した大阪の住居の裏の土手の上に、時折兵士を乗せた列車が通った。私は汽車が見えなくなるまで手を振り、兵士達も手を振ってそれに応えてくれた。しかし、女学生になった頃には、列車の窓は板で打ちつけられていた。兵士達はその隙間からじつと外を見つめているようだった。

戦争末期のその頃は、恐らく兵士自身も自分達がどこに連れていかれるのか、中国なのか南方なのか行き先は知らされていなかったのである。

農作業の喜び

昭和の初めからの農村の貧困と疲弊については既に触れているが、それに追討ちをかけるように凶作や飢饉が何度も襲って、農家の生活がこれでもかこれでもかと追いつめられ

ていく様は胸が痛んでならない。

男性の短歌には、こうした状況に対して直截に怒りを表現したものが多いが、女性の短歌には控え目なものが多い。特に「婦人倶楽部」は「蜻蛉」や「木枯」といった題を設けており、自ずとその制約の中での表現となる。主婦之友は自由題ではあったが、家族や身近な生活のことを歌うことという制約があった。

此の秋の不作も知らず蜻蛉つる子等に淋しき夕日影かな

岐阜 土屋千恵子 「婦人倶楽部」8・10 今井邦子選一等

選者の評に「今年早魃かんばつつづきにて秋の不作をきく時機にかなひ、しかも真情のあるうるほひありて人の心を動かす。秀歌第一に位す」とある。まさに然りの感を抱く。

亡き吾子のみ魂をのせてきたりしか小さ蜻蛉わが衣に止まる

福島 弓削美津枝 「婦人倶楽部」8・10

この歌も今井邦子選で秀逸の冒頭に掲載されている。同じく蜻蛉を歌っているが、亡き子への母の思いがよく伝わってくる。

以下は、貧しい農村の生活の中で哀歎を歌っているが、しっかりと大地に根を下ろし、自然と四季を楽しみつつ農業に携わっている女性のたくましさ喜びが伝わってくる。

何煮るも松葉のみ焚く貧しさにわが手のひらの黒みたるかな

茨城 高橋けい子 「主婦之友」 7・4

朝日の出間近になりぬ揚水の水車をわれは踏み急ぐなり

福岡 有延フミコ 「主婦之友」 7・10

朝露をわらぢの裏に感じつつ草刈りに行くわれはたのしき

大阪 木原敏恵 「主婦之友」 7・10

木枯しの吹きつのり来る夜のくだち一人ろばたに縄なひ居るも

福島 五十嵐よし 「婦人倶楽部」 8・12

夜の明けぬ内にと、水車を踏む作業をしている農婦には、夜もまた縄ないの仕事が待っている。夫が戦地であれば農作業に加え、育児家事ときには老父母の介護一切が嫁の肩にかかって、どんなに重労働であつたらうか。

生みたての卵のぬくみしばらくは頬にふれつつ木枯をきく

大阪 児玉テツ 「婦人倶楽部」 8・12

バック入りの卵しか知らない今の子ども達には、卵のぬくみに束の間心を和ませている作者の気持ちを読み取れるだろうか。

田草取る母の忙しき聞き分けて畔の蓆に睦み居る子ら

新潟 和田エツ 「婦人倶楽部」 6・9

留守居する吾子にと野良の帰り道草に光れる蛍を捕るも

新潟 武田翠子 「婦人倶楽部」 6・9

母の働く姿を見ながら畔で遊び待つ子ら。また、疲れた身での帰り道、家で待つ子の喜ぶ顔を思い浮かべて蛍を捕る母、親子の愛情が素直に伝わってくる。やがて深刻な農村の状況を打開すべく、ブラジルや中国東北部、東南アジアへの移民政策がとられるが、それはまた新たな悲劇を生むことになる。

父や兄への思い・結核の猛威(一)

昭和初期の婦人雑誌の投稿歌を見ていると、家族への愛情が伝わってきて胸を打つ。雨が降ると傘を持って駅に父親を迎える風景がなくなつて久しいが、マイカーの出迎えや安価なビニール傘がそれに替つたとしても、何か大切なものが失われたような気がする。

忙はしくて車曳く父帰らねば灯ともしをつけて迎ひに出づる

長野 吉田みのる 「婦人倶楽部」 6・9

この歌に見られるような父を案ずる気持や情愛はどこへ行つてしまったのだろうか。

また、投稿歌の中にはとりわけ兄への思いを歌つたものが目立つ。家制度の下で長兄の

責任は重く、父を亡くした場合、弟妹達が成人するまで一家を背負つて養育する努力は並大抵のものではなかった。そういう兄を見ていたからこそ妹として短歌に感謝の気持がこめられていたのであろう。

親持たぬわれら姉妹に絵羽織を送り給ひし兄を拝みぬ

神奈川 橋本須磨子 「主婦之友」 7・4

私の母も親が早く亡くなり、神田に住む長兄が嫁入り道具をいっさい整えてくれたが、婚礼寸前の関東大震災ですべてを焼失、母は着のみ着のまま山の手の家で父の家に辿り着いた。長兄はその後も婚家に対して心配りをし、父親的役割を果していたと聞く。

みな寝ねし夜半に読まんと兄上の手紙は見ずに帯に秘めおく

福島 今泉のぶ 「主婦之友」 6・2

一刻も早く読みたい気持を押さえて、夜半遅く、やっとひとりになって食い入るように兄の手紙を読んでいる姿が浮かんでくる。

恙なく航海終へて帰り来し兄をとりまく喜びの顔

高知 三村水江 「主婦之友」 7・2

まぐろを一杯積んで半年も不在だった兄が大漁と共に帰ってきた。真黒に日焼けした兄を囲んで家族の喜ぶ姿が目に見えるようだ。しかし、病いを得て都会から帰ってきた次の

短歌には、なんともつらいものがある。

都より病みて帰れる兄上の車さみしき夕暮の野路

千葉 鳥海昭子 「主婦之友」 7・11

家までの道をもはや歩く体力もなく、大八車に寝かされて帰ってきた兄、恐らく当時猛威を振るった結核にかかったのではないだろうか。

蚊帳ごしに言葉かけつつ常病みの兄をあはれにいたはる夜かな

広島 中本留子 「主婦之友」 7・9

大正八年に結核予防法が制定されたものの具体策は「大気」「安静」「栄養」が言われるのみで、特に青年層の死亡率が高かった。都会に出て働いていた若者も女工さんも、結核とわかればすぐ田舎に追い帰された。そして、捨てさられるように納屋に隔離されるのであった。蚊帳ごしに声をかけられていた兄は、まだしも幸せといえよう。

少し遡るが、正岡子規はカリエスで明治三十五年三十四歳十一月の若さで死去、石川啄木も二十六歳肺結核で、長塚節は喉頭結核を患い、熱のある身で旅をさまよいついに倒れる。昭和になってからは、中村憲吉、吉野秀雄らの多くの歌人が業病の苦しみと対峙しつつ秀れた歌を作っている。

女が病む日々・結核の猛威(二)

六月号では、昭和初期の結核の猛威について触れたが、その治療法として「大気」「安静」「栄養」しか策がなく、感染を恐れて隔離を余儀なくされた患者はどんなにつらい思いをしたであろうか。まして、妻の立場であれば男性と異なる複雑な思いがあったろう。我が書きし文は消毒して読むといふ夫の言葉をさびしくききぬ

鈴木三枝子 「アララギ」 11・10

吾が病怖れて去にし付添婦を夜もすがら思ひ遂に憎めず

伊谷澄子 「羅」 16

妻が長病みとなれば、当然夫との間もぎくしゃくとする。すぐに実家に戻されて離縁という形になることもあった。薬をも掴む思いで鯉の生き血を飲む人もいた。

鯉の生き血ぬらりと舌に冷たかりひとみを閉ぢてひといきに飲む

吉松綾子 「ポトナム」 8・3

血咯く夢しばしば見つつ久しくも咯くことなき身を頼まむとする

金田千鶴 「アララギ」 8・3

『昭和萬葉集』で作者の略歴を見ると、吉松綾子はこの歌を発表した二年後に、金田千鶴は一年後にいずれも三十代の若さで死去。まさに死と向き合いつつ詠んだ短歌であろう。

一九三五(昭和十)年、結核はついに死因の一位となった。昭和初期の農村の不況で農村の青少年は都市の軍需産業地帯に出稼ぎに行った。そこで待ち受けていたものが結核であった。肺結核で死亡の多かった職業は、製版、印刷、繊維産業で、特に繊維産業で働く女性達に多かった。結核による死亡者は年間十四万人を超え、患者は百四十万人に上った。会社を鹹になつて多くの青年や女工さん達が帰郷し、農村での結核の二次感染をさらに広めたのである。兵士の供給を農村に依存していた軍部にとって、二十代の青年達の結核による死亡率の高さは打撃であつた。

七度二分七度三分の熱ゆゑに嫁ぎもならず二年を経ぬ

東京 鈴木静子 「主婦之友」7・4

若い人達に蔓延した結核だけに、特に年頃の娘たちは先の見通しも立たず焦る思いが強かつたことであろう。

この沈黙しじましばしあれかし病む姉の寢息漸くととのひたれば

三重 中田良子 「婦人倶楽部」8・5

よき母と兄とやさしき君とあり静かに癒ゆる日を待つ吾は

神奈川 土居由美 「主婦之友」 8・11

せめてもの幸いは、当時家に看病をしてくれる家族がいたことである。姉の寝つくのを静かに見守っている妹、長患いの患者に暖かに接している家族の愛があれば心穏やかに療養の日々を送れたであろうが、現実には経済的な問題もあり、隣近所からの感染に対する中傷誹謗もあり、つらい日々であつたろう。

久々に病癒えたる吾なれば薄化粧して夫を迎へむ

山形 高橋さつゑ 「主婦之友」 7・12

床上げて今朝しもあぐる束ね髪小鳥にだにも見せたかりけり

大分 野村公子 「主婦之友」 7・9

この二首からは病が癒えた素直な喜びが伝わってくる。

ふるさとを恋う

昭和の初期の女性の投稿歌からは、ふるさとを恋う気持が切々と伝わってくる。地方から都会に出たの奉公人であれば蔽入りの時しか帰れず、また嫁の立場でもなかなか田舎の

実家に帰ることは言い出しにくいのであった。

その上、現在のように交通の便がよくないからふるさととは遠い遠い所であった。いま新幹線で二時間ちよつとで帰れる山形も、昭和九年普通車であれば約十一時間はかかっていた（当時の時刻表複製版による）。そして、今のようバスやマイカーもないから、駅から山道を何里も歩いたのではないだろうか。

二里の道あゆみて母は朝まだき停車場に我をむかへたまへり

広島 外山道子 「婦人倶楽部」 6・9

待ちに待ったわが子の帰郷、夜の明けぬうちから二里の道を歩いて迎えに来てくれた母の姿を見つけた時の喜びが伝わってくる。

しかし、現実にはなかなか帰れない事情もある。次の作者が帰郷できるのはいつの日か。
日に一圓得る日来たらば故郷に母をたづねん願ひも久し

名古屋 渡辺修子 「婦人倶楽部」 8・5

故郷の弟の便りなつかしき炬燵によりてまた読みかへす

長崎 松原美津子 「婦人倶楽部」 8・12

一日も早く帰りたい気持を抱きつつ、父母のこと故郷のこと、あれこれ書き綴る弟の手紙をくり返し読み返している心情が切ない。

いさかひて丘に登れば故郷の海さしてゆく船のあるなり

朝鮮 森脇富子 「主婦之友」 6・1

朝鮮と日本を隔てている海、それは国内とは違って、どうすることもできない絶望感を抱かせるものであろう。しかし、いま丘の上から日本に向かって出て行く船が見える。それを見つめている作者の気持は察するに余りある。

現在ではどこからでも宅急便を簡単な包装で送れるが、昔は荷造りに苦勞し、山間部であれば遠い郵便局や駅に小包を出しに行くのは大変なことであつたろう。それだけに母親から小荷物に託された愛情を娘たちは心の底からありがたく感じ、しかと受けとめている。

見馴れたる母の浴衣の古着もてこの小包は包まれて来ぬ

鳥取 角 ぬい 「主婦之友」 8・1

しっかりと結ばれた紐を解き、包装紙を取り外したその下に、更に荷作りのために使われていた母の浴衣。作者はなつかしさのあまり、母とも思えるその浴衣を思わず抱きしめたのではなからうか。

母上の手紙を添へし小荷物は山の香高きわらびなりけり

東京 岩城トミ 「主婦之友」 6・8

ふるさとの土と思へば送り来し茸の砂も手にとりて見る

小荷物を開けた時の山の香も茸の砂も、なつかしさ一杯でいとおしんでいる作者の気持がよく伝わってくる。

福島 阿部登美子 「主婦之友」7・12

一方、この頃から農村の窮乏打開対策もあって中国東北部への移民計画が積極的に進められていった。そのことは敗戦時多くの残留孤児や残留婦人を生む。戦後五十年を経て、なおふるさと日本に帰れなかった中国残留婦人の望郷の念はいかばかりであったろう。

家族の団欒と心の充足感

昭和初期の投稿歌からは、子どもをいとおしむ気持と心の充足感を満たしている家族の団欒の姿が浮かび上ってくる。子どもの数も多く、子育ては大変であったろうが、短歌からは母親の気持のゆとりが伝わってくる。

吊しある白蚊帳ぬちに三人の吾子の寝がほのあどけなきかな

長野 小澤絹代 「主婦之友」8・8

釣蚊帳を這出づる子は笑まひつつ朝日に小さき手をかざしたり

わが子の寝顔を、また起きてきた姿を「なんと可愛いことよ」と感じている母親の手放しの愛情が感じられる。

子の指のとどく限りは破りたる障子を立てて楽しきわが家

東京 小菅汀子 「主婦之友」 7・12

からかみに書きたる吾子のらく書の筆の力にしばしみとるる

京都 小谷松代 「主婦之友」 8・4

洗濯の泡立つ水に戯るる吾子の笑顔にしばし手を止む

岡山 田淵秀子 「主婦之友」 6・11

障子を破るのもらく書をするのも、つい「いけません」と叱り、なんでもせつかに早く早くと急ぎ立てている現在の育児、この短歌に見る母親の姿はなんと大らかであろうか。しかし、一方でお年寄りに敬意を示し、大切に作る気持を行為で示すことが家族にとって大事なことである。

廃物の小切れをはぎて作りたる炬燵ぶとんに母をあてまつる

山口 中村秋子 「主婦之友」 7・3

姑上の齡永かれと願ふなりわれに優しく世に長け給へば

大阪 神足ゑん子 「婦人倶楽部」 8・5

もちろん大家族の中で嫁姑の激しい確執のある時代だった。しかし、この短歌からは姑から学んでいこうとする作者の素直な気持が伝わってくる。現在でもこうした気持を子ども達にきちんと伝えることが必要ではないだろうか。

テレビもない時代、冬であれば夕食後炬燵が家族の団欒の場となる。

母がむく林檎りんごのそばに子供等は眼つぶらにその手見まもる

京都 信樂文字 「主婦之友」 8・3

冬の夜は心親しくうからどち炬燵に入りて編物するも

福岡 近松紫衣子 「婦人倶楽部」 8・12

子等喜びこたつのまはりにつどひ来ぬ四人の顔をしみじみと見つ

新潟 金子道 「婦人倶楽部」 8・12

子供らが炬燵に入りて本読むを聞きつつ土間に菜を揃へ居り

福岡 安武よし子 「婦人倶楽部」 8・12

それぞれに団欒の中から気持の交流が伝わってくる。そして、次の一首には現在忘れがちな最も大切なものが詠まれている。

おのおのおの炬燵に向ひ黙々と何か為しゐて心足らへる

島根 段塚光子 「婦人倶楽部」 8・12

会話が成立しないまま一人がテレビを見、一人がファミコンをしという風景ではない。ここには根底に家族の愛情に支えられた安定した充足感がある。家庭にとって最も大切なのはこの「心足らへる」という充足感なのではなからうか。

働く女性達の日々から

女性の職業としては、明治時代からすでに女教師、電話交換手、看護婦、産婆などがあつたが、第一次大戦以降、婦人記者、美容師、医師、タイピスト、オフィス・ガール、デパート・ガール、バス・ガールへと、その職種は多彩にひろがった。一九三〇(昭和五)年の国勢調査によれば、女教師九万四千人、看護婦・産婆十一万七千人、美容師・髪結九万八千人、電話交換手三万六千人、デパート店員二万二千人となっている。

こうした社会的背景を反映して、投稿歌にも昭和初期の働く女性の哀歓が伝わってくる。チンドン屋窓を過ぐれば教へ子らみないつせいに吾が顔をみる

大阪 藤田ひさ子 「主婦之友」 8・5

教室の子ども達の姿が目に見えるようだ。

弁当のぬくみしみきて出勤の雪の朝の肌のしたしさ

東京 音藤フサ子 「主婦之友」 8・5

銀行の営業台にさつを繰る指の冷き冬となりたり

石川 村山辰花 「婦人倶楽部」 8・3

勤め終へ指破れたる手袋のつくろひなして今宵更け行く

北海道 佐々木幽雅子 「婦人倶楽部」 8・3

胸に抱えたお弁当のぬくみを感じつつ出勤の道を急ぎ、夜は手袋の繕いに精を出す姿に堅実な生活観が感じられる。

縫ひ上げし手際如何にと姿見に事務服姿うつし見るかも

熊本 梅井悦子 「主婦之友」 6・11

見つめて淋しくなりぬ硝子戸にわが事務服の姿うつれり

福井 淡路さゆり 「主婦之友」 7・5

働く女性は増えたとはいえ、当時年頃の娘は家にいて花嫁修行をするのが常であったから、経済的な理由で働かなければならないことに負い目があつて、自分の事務服姿を淋む気持が拭えないのであろう。しかし、次の三首からは働くことで自立しつつある女性の喜びと自信が伝わってくる。

給料を始めて得たる喜びを母に告げむと道急ぎ居り

愛知 河合千代子 「婦人倶楽部」 6・9

一つ一つ己が力にあがなひし嫁入り道具ふゆる嬉しさ

石川 岡田さかえ 「主婦之友」 6・2

嫁ぐ日の費用にせむと青バスに汗ながしつ今日も働く

東京 白井鶴子 8・8

とはいえ働く女性の職場環境は悪く、現在では考えられない気苦労があったのではないだろうか。次の一首には勤めに出かける前の不安と緊張感が感じられる。

勤め持てば朝の化粧けいほひにおのづから心しまりて鏡見まもる

東京 高草木榮子 「主婦之友」 8・1

この後、日中戦争が始まり、一九四一（昭和十六）年太平洋戦争が始まると、女子労働は強制的に戦争体制に組みこまれてゆく。応召による男子の欠員と軍需産業の拡大は、今まで女性が携わらなかった部門の旋盤、圧延、鋳物、プレス、ドリル、機械組立などの仕事や、さらに交通部門では、車掌、出改札係だけでなく、電車、大型トラックの運転士等にも従事するようになった。このことは一面女性の職域拡大のチャンスとはなったが、戦争は強制的に過酷な労働を女性に強いたのであった。

参考文献・小島恒久「働く女性百年のあゆみ」 河出書房新社一九八三

馬との別れ

農家にとって、農耕の必要な働き手である馬は家族同様の存在であった。投稿歌には馬への愛情がにじみ出ている。

峠越え村の灯かげの見え初めば馬も足並はやむらしき

福岡 松前昌子 「婦人倶楽部」6・9

やっと家々の灯が見えてきて、ほっとしている作者には馬も喜んで足並を早めているように思える。軽やかな蹄の音が聞こえてくるようだ。

今宵また吹きつのるらし寒ければ厩屋の藁を取り替へやらむ

埼玉 加藤由子 「婦人倶楽部」8・12（二等）

茅野雅子の評に「吹きつのるらし丈けでも木枯しの風だということが十分わかりましよう。やさしく動物のことを思いやる心情が率直に出てゐます」とある。

野放しの馬戻り来ぬ^{こがらし}困にただれし眼には涙ひかれり

北海道 島田節子 「婦人倶楽部」8・12

「お、お、寒かっただろう」と、抱きかかえるようにして馬小屋に入れてやる作者の姿が目に見えかぶ。

荷車にぶらさがりゆく村の子を馬ひく人は笑みてしからず

岡山 安木 久 「主婦之友」 8・5

馬を引く人と村の子ども達の楽しい交歓風景もあつた。次の投稿歌は馬のいる風景をそれぞれ感性豊かにとらえている。

夕まけて木枯荒さむ原中に馬は馬どちいななきあへる

広島 塚本静子 「婦人倶楽部」 8・12

木枯しに暮れ沈み行く倉庫街馬ひとつめて黙もたするあはれ

岩手 森田ひさ子 「婦人倶楽部」 8・12

かぎりなく蜻蛉ながるる草原に馬いたはりて兵ひとりわり

東京 新津なみ 「婦人倶楽部」 8・10

戦争と共に、馬は輸送の重要な担い手となった。機関銃や歩兵砲、弾薬や食糧品など、重い荷物を一杯背負わされて、歩兵と共に果てしない行軍を続ける軍馬。喘ぎつつ山道を登り、ぬかるみに足を取られ、死んでゆく馬も多々あつた。一九三四（昭和九）年、野戦部隊には馬が三十三万頭もいたという。

いわば戦友ともいえる軍馬を詠んだ短歌は男性に多い。馬の荷物を兵隊が背負って、暑さにあえぐ馬をいたわっている姿を詠んだもの、傷ついて使い物にならないために捨てた馬が闇の溪を下りて再び自分の所に帰ってきたことを詠んだもの等、軍馬への絶ち難い愛情が切々と伝わってきて胸を打つ。

そして、戦局の拡大と共に農家の馬も召集という形で強制的に徴発されていった。

兵と馬のどよめきの後に女らの小走る足音しばしつづけり

古島一子 「アララギ」12・2 「昭和萬葉集」巻四

一すぢのかわける道を召され行く馬の嘶くこゑのかなしも

三島ふさ 「アララギ」12・10 「昭和萬葉集」巻四

家族の一員のようにして愛情を注いできた馬との別れはどんなにつらいことであつたらうか。「うちの馬は」と必死にその姿を探す女達、召されいく馬の嘶きに胸をしめつけられる女達の悲しみがよく伝わってくる。

解説

「女性の短歌から見た昭和と戦争」は短歌誌「サキクサ」に、一九九七年四月から一九九八年十二月まで連載されました。

「女性の短歌と戦争についての文章を『サキクサ』に書くことにしたのよ」とおっしゃったとき、常にお忙しい方がどのようにして資料を集められるのかとその大変さを思い、それをあえてなさろうという意志の強さに敬服しました。

といますのは、私はかつて「女性の短歌からみた昭和の女性史」をまとめたかと思いつつながら挫折して、中断した経緯がありましたからです。「昭和万葉集」を刊行と同時に購入していましたが、仕事に追われて本の購読もいつしか中断し、手許に巻の抜けた半端な全集が残っただけになりました。病のために仕事をやめた私はそのことを思い出し、資料探しに図書館に行きましたが、古い雑誌を閲覧するのに長時間待ったあげく目当てのものがなかったり、新聞のマイクロフィルムを読むのは目の悪い私にとって無理だったりしたのです。

間もなく「サキクサ」誌に茂登子さんの連載が「女性の短歌から見た昭和と戦争」とい

う題で掲載されるようになりました。私は昭和の経済恐慌などの社会背景から出発しなくては、昭和の戦争は語れないと思っていましたので、茂登子さんがやはり同じ構想ではじめられたので嬉しくて毎月の連載を楽しみにしていました。婦人雑誌や新聞の投稿欄・『昭和万葉集』などに資料を求めての執筆は大変なお仕事だと思いました。昭和の女性たちの生活・労働・病氣・経済・思いなど、さまざまな方面にわたっての短歌を取り上げられ、それはそのまま戦争に向かって進んでいく昭和の社会史ともなっておりますのを、興味深く拝読しました。

連載もいよいよ満州事変にさしかかった頃、茂登子さんのご入院が長びきそうだと伺いました。病氣の時のお見舞いは嬉しい時とうとうと楽しい時がありますのを、何度も入院を繰り返した私は知っていましたので、それまでお電話もお手紙も遠慮していました。

連載のことを気にしていらっしゃるに遠くない、何かお手伝いできることがあればと思います、少し話の筋は横道にそれでも時代が飛んでも、私の手許の資料で入院の間だけでもつなぎのお役に立つことがあればと、ある日思いきってお電話しました。

茂登子さんは思いがけず元気そうなお声で、「今ちようど電話のできる体勢でいたから長話できるわ」とのことでしたので、連載のことをお尋ねすると、「今年中の分はできているのよ」というお返事。私はすっかり安心してしまいました。そして茂登子さんらしい

周到さに感服しました。

その時私は今年中のものができていれば、来年はお元気で書き続けなされるものと信じて、それが御逝去のあと遺稿としてサクキサにしばらく載ることになろうとは予想もしませんでした。

連載最後の十八回目は「馬の別れ」。「めんこい子馬」を思い出しながら読みました。

「昭和と戦争」と題しながら、日中戦争にもならないうちに絶筆になってしまわれたのはさぞ残念でいらしたでしょう。茂登子さんのお書きになりましたことはこのあとに多くおありになったに違いないと思いますと、その思いを語ることなく逝かれたのは惜しまれてなりません。

女子学徒たちが、未婚の女性たちが根こそぎ動員された日々の文集が私の手許に多くあります。その中には当時の短歌も載っています。茂登子さんが太平洋戦争を書かれる時は資料として使っていたかと思っておりますのに、それもかなわぬことになったのはとても残念に思います。

茂登子さんの連載は未完に終わってしまいましたけれど、その生の最後まで書き続けられた文章がまとめられて、遺稿集に収められ世に残ることは意義深いものと思っております。

大原富枝と「婉」の足跡を訪ねて、

そして短歌のことども

高知県の吉野川沿いに大原富枝文学館を訪ねる。

高知の親しい友人が大原富枝文学館を案内してくれたのは、四年前の春まだ浅い頃であった。市内から約一時間半、車はひたすら北の四国山脈に向かって走り続けた。文学館は山深い長岡郡本山町にあった。近くには吉野川が流れ、そのやや上流が大原さんの生地である。「吉野川の流れは私の文学の源泉」という大原さんの深い思いと、大原文学を後世に伝えたいという町の願いが一つになって、高知県で始めてのこの文学館が生まれたのは、一九九一年十一月二十五日である。開館後一年と少し経った三月末日、まだ木の香も新しい文学館に、朝いちばんに訪れたのは私たちの二人だけだった。静かな部屋に展示されている大原さんゆかりの品々を私たちは心ゆくまで見ることができた。

まだ午前の早い時間であったためか暖房もゆきわたらず、館内の寒気はことのほか厳しかった。高知の春は早いのに、その年はなぜか遅く、桜の開花も遅れていた。しばらくす

ると手も足も氷のように冷たくなっていった。しかし、その冷気の中で、大原さんの今日に至るまでの作品の年譜を見続けていると、私の心は次第に強い感動で熱くなっていった。

十八歳咯血以来、再発の中で小説を書き四十五歳で受賞

以下、この度刊行された大原富枝全集（小澤書店、一九九六）の年譜や著者自身の執筆による年譜「ふるさと の丘と川」（大原富枝文学館刊行、一九九二）から、ごく一部を抜粋しよう。

大原さんは、一九一二（大正元）年九月二十八日生まれ、一九九七年の九月には八十五歳になられる。高知県女子師範学校に学ぶが、一九三〇年六月、十八歳の時に教室で咯血入院。退院後は吉野村（現吉野）の自宅で十年近い療養生活を送る。一九三三年二十一歳、小康状態の時に初めて投稿、「姉のプレゼント」が「令女界」（齊文館）に入選。一九三五年二十三歳、短篇小説「氷雨」が「婦人文芸」に入選。このころ短歌数首も入選している。その短歌については最後に触れたい。

以後も小説を書き続けているが、一九三九年二十七歳の時に、再び療養生活に入る。しかし、一九四一年二十九歳、創作に専念するために上京。代々木駅前出版社で封筒書きの仕事や、その後二年間、都立十三高等女学校の生け花教授として勤務しながら作品を書き続ける。

戦争が激しくなり、空襲しきりの毎日で東京に住むのはきわめて困難であつたと思われ
るが、その中で敢然と創作を続け、敗戦を迎える。しかし、戦後二年目の一九四七年三十
五歳の時には敗血症で倒れ、父と姉が上京して看病、病氣余後の療養を兼ねて都下の東久
留米に家を買ひ父と同居する。それから約八年後の一九五五年四十三歳には、またもや病
氣が再発する。それでも病床で朝の熱のない時に「ストマイつんぼ」を少しずつ書きつぐ。
そして、この作品が一九五七年第八回女流文学者会賞を受賞するのである。十八歳で咯血
してから何度も病氣が再発しながら、作品を書き続けることを止めることなく、以来実に
二十七年、四十五歳にして初めて受賞したのである。

野中婉えんとの運命的な出会い

大原さんと野中婉との出会いは、実に運命的である。小説「婉という女」は一九六〇年、
四十八歳の時に講談社から出版され、第十四回毎日出版文化賞、次いで第十三回野間文芸
賞を受賞し、代表作となるのだが、ここに至るにも長い長い道りがある。

小説の主人公でもあり、実在の人物である野中婉は土佐の治山治水で名を馳せた名奉行
野中兼山の娘である。藩政の改革のために、愚かれたように新田をつくり、堰をつくって

きた野中兼山が、そのための酷税と絶え間ない夫役のために政敵によつて失脚させられ、急逝する。四十九歳であつた。

小説『婉という女』によれば（それは小説ではあるが殆ど事實に即して書かれていると思われる）、父の失脚後、野中家には父の追罰として、一家取り潰し、領地没収、子女八人とその母たちを宿毛に配流申しつけるといふ思いもしない嚴罰が下される。その時、長兄十六歳、三兄八歳、弟五カ月、次兄十五歳とその母、姉十八歳とその母、姉七歳、妹三歳と母、こうした異母きょうだいとその母たちが幽獄に入ったのである。この時、婉は四歳であつた。

そして、四十年という重い年月が過ぎ、兄や弟など男たちがみな死に絶えたとき、初めて赦免される。男系が絶えて、野中家の血が絶えたことによる赦免である。なんという苛酷な運命であろう。昔のお家断絶のむごさがここにある。こうして婉は、竹矢来に囚まれていた幽居から、四十年ぶりに外へ出る。そして、山川を越え高知の朝倉の里をめざして帰っていく。

その婉の存在が大原さんの心に住み始めたのは、少女の頃であつた。まず小学校の時には婉の父である野中兼山がその母を儒葬にして祭つた婦全山に遠足に行き、先生の話された墓の由来と兼山の悲劇的な生涯が少女の心に深く影を落とす。

次の機会は、十一歳の頃、父に連れられて高知城に行き、鬱蒼とした木々に囲まれた兼山の屋敷跡で、古井戸を覗き込んだ時であった。その時、父の「これがお婉さまの産湯をつかわれた井戸じゃそうな」と言ったことばに、婉の存在が強い実在感となって、大原さんの胸に住み始めたのである。

さらに年月を経た後、婉との決定的な出会いは、一九四四年大原さんが三十二歳のときであった。一時高知に帰郷したときに大原さんは県立図書館に行く。この時には、すでに婉のことが作品の中の人物として考えられていたのである。婉の資料が少ないという訴えを聞いていた館長は、やおら席を立ち、奥から紙に紐をかけた古い包みを持ってきた。

それは、なんと婉の自筆の手紙であった。和紙は黄ばんでいて、ずいぶん損なわれていたが、まさに婉の自筆がそこに読み取れた。その二十六通を大原さんはどんな思いで読まれただろうか。これこそ運命的な出会いである。その上、さらにこの手紙との奇しき縁ともいうべきことが起きる。それは、連日図書館に通い、写した手紙の原本が間もなく高知市の空襲で焼けてしまったのである。婉との縁は決定的なものになった。大原さんと婉はしっかりと結ばれ、十六年後の四十八歳の時に「婉という女」の出版、受賞へとつながるのである。

婉との出会いから作品化へも長い長い道のりである。あまりにも安易に小説家となり、

有名になることの多い今の時代に、なんと努力と忍耐強さであろう。さらに、ちょうど病のあとであった私には、病気をくりかえしながらも諦めずに一筋の道を歩み続けてゆく大原さんの生き方に深い感動を覚え、大変力づけられるものがあつたのである。そして、すっかり冷えきってしまったが、胸に熱いものを抱きつつ、大原文学館を辞した。

大原富枝さんの短歌にふれて

文学館では気がつかなかつたのだが、私が大原富枝さんの短歌を知つたのは、「昭和萬葉集」（講談社、一九七九）の巻四を読んでいた時である。巻四は昭和十二年から十四年にかけての短歌を、多くの短歌誌他から幅広く選者が選んで掲載しているが、その中の作者の名前を見て「おや」と思った。大原富枝とある。大原さんも一時期短歌を作られていたのだ。「出勤」という項目の中に二首、「生活の周辺」の項目の中に四首が掲載されていた。そして、「昭和萬葉集」巻五（講談社、一九八〇）の「まんよう」月報四に「青春の日の歌々時代の緊縛に促されて」という一文が掲載されている。

「…前略…」

神近市子氏が新しく「婦人文芸」という文芸雑誌を出されて、そのあるいは創刊号かと

思われる昭和十年一月号に、私の短歌が五首のついている。時雨という題がついている。

夕まけてつひに降りいでぬ今朝あけしこたつに集ひ椎の実を焼く

ひそやかに降りいでぬらし隣りの家のくりやの音も遠きこちす

たどたどしい詠みぶりだが、その年の四月号にいまもどうにか読むに堪える二十五枚か三十枚くらいの短篇小説「氷雨」が載っているのを見ると、このころから私はものを書きはじめたのだと思う。短歌に比べれば小説の方がまだしもの出来のようである。

昭和十二年七月七日、日支事変といわれた戦争の本格的になった年で、私は療養以来初めてこの春、父の故郷の海岸の村まで旅をしている。高知の街を七年ぶり歩いたのであった。

トンネルを出づれば桑の芽の青し越え来し山の重なりて見ゆ

山ずみに馴れて久しもカフェ近きちまたの夜を眠りがてつつ

みんなみに空はひらけて大土佐の光ゆたけしこの浜の村

ストローの菌にふれて鳴る音涼し松の花粉の白きテーブル

(桂浜にて)

…中略…

そのころ、私は回復したかと思うとまた突然小咯血を繰返すというふうな、不安定な状

態にいた。

また病みてこころ稚くなりけり古き恋をば告げきしひとあり

春浅き南の浜に日ひと日語りしままにまた逢はぬかも

中国の戦野に死んでいった友人のことをそんなふうには詠みとめてある一頁もある。」
続けて、大原さんは短歌について次のように書いています。

「散文の日記にあからさまに書き残したくはない思いというものがある。散文に書けばどうぼかしようもないことも、短歌になることによって抽象性をもち得るという場合もある。たとえば短歌で「君」という場合、それはべつに特別の人を意味しない。一般であつて非常に広い意味を持っている。

また身体の弱っているときは、長い文章は書けないが、下手でも短歌一つ書きとめておくことによって、一つの記録とも、心おぼえともなってくれるのである。

私の短歌はおおむね両様の意味で詠まれたものが多い。まずい歌だな、とわれながらへきえきしながらも、しかしそのことによって当時のことがもやもやと霧がたちまようように、匂うように周辺に漂いでてくる。ひとにはわからないが、私自身にとつては大切な歌なのである。…後略…」

こうした一文を見ると、大原さんの短歌についての考え方、また、短歌を大切なものと

して考えていることがよくわかる。しかし、大原さんの短歌は、この度刊行された全集に入っていないので、青春時代の短歌の一部を知り得たに過ぎない。しかし、その後は大原富枝文学館の開館の折に短歌を寄せられるようなことはあつても、出版物には発表されていないようである。

しかし、心の奥深く流れている短歌への思いは、短歌を主軸に据えた作品、あるいは歌人を主人公にした作品に凝結されて現われているように思われる。例えば、多くの作品の中で、『建礼門院右京大夫』（講談社、一九七五）、『忍びてゆかな—小説津田治子』（講談社、一九八二）、『わたしの和泉式部』（中央公論社、一九八三）、『今日ある命—小説・歌人三ヶ島葎子の生涯』（講談社、一九九四）、『原阿佐緒』（講談社、一九九六）などの作品が挙げられる。

また「詩歌（うた）と出会う時」を雑誌「短歌」（角川書店、一九九五年一月号から一九九六年十二月号）に連載。斎藤茂吉、會津八一をはじめ最近の歌人に至るまで十二人にわたって多くの人をとりあげて、エッセイを書いている。これらのことから大原さんの短歌への思いの深さが伺われる。

婉のゆかりの地を訪ねて

小説「婉という女」に衝撃を受け、また作者である大原富枝さんの生き方に深く感動した私は、今回、高知に婉の足跡を訪ねてみた。それは大原さんの足跡を訪ねることもあった。婉が配流された宿毛の地までは行くことができなかったが、まず訪ねたのは、高知県立図書館である。高知城の追手門を入ると大きな木々に囲まれて、県立図書館はある。図書館の人々は忙しげに本の貸し出しをし、シルバー・エイジの人たちや高校生が静かに本を読んでいる。ここで、五十三年前に婉の自筆の手紙に出会ったときの、大原さんの気持ちを感じる時、私も一瞬息がとまるような思いになるのだった。

野中兼山屋敷跡の碑は追手門の前のお堀端に立っていた。明るい土佐の日差しを受けて、車が行き交う通りに面して立つ碑を見ると、誰がああ長い年月にわたる野中兼山一家の悲劇を想像することができようか。しかし、兼山の功績は後に再び明らかにされ、高知には五台山や土佐山田などにも野山神社が建てられ、郷土の偉人として語り継がれている。

次に、赦免されて婉がまず居を定め、やがて医業で生計を立て、六十五歳で死ぬまでの二十五年を過ごしたという屋敷跡を訪ねてみた。高知市の繁華街から市内を走る路面電車

(高知では土佐電鉄なので土電Ⅱとでんと言っているのだが)に乗って約二十分で朝倉に着く。婉の屋敷跡の碑は、その電車通りに面した民家の庭に建てられていた。屋敷は跡形もなく、ただ碑のみが雑然とした庭に建っているのみであった。

婉の手紙との出会いの後、ここを訪ねた大原さんは「あたりは一面のれんげ畑で、その小溝の畔りの水草の生い茂る岸に立っていると、そこに膝をついて米を洗い、菜っ葉を洗ったであろう婉の姿が私の眼に浮んできた」と『婉という女』のあとがきに書いている。それから五十三年経った現在のこの跡地には、その面影はまったくないが、すべては大原さんの身魂こめた筆で『婉という女』に書き込められているのだから、それでよしとしよう。

次に訪ねた野中兼山と婉の墓は、市内を流れる鏡川のずっと南、高見山のトンネルの入り口にあった。尋ね歩いて、やっと小高い山の中腹に、その墓地を見つけた頃には、日は西に傾いていた。ねぐらに帰るのか、たくさんの烏が鳴き騒ぎながら飛んでいく。その羽音すら不気味に聞こえる墓地の山道を一人で登っていくのは心細い。しかし、兼山の墓地は意外に近くにあった。階段を登り切った所の一画で、低い土塀に囲まれている墓地の中には、正面に兼山、右手に婉の墓があり、他の家族の墓もある。幽居にある時、兄から父の話の聞き、誇りに思い、心から敬愛していた婉である。死して同じ墓所に並ぶことがで

きたのは、せめてもの幸せというべきか。

お婉堂を訪ねる

目を改めて香美郡の土佐山田にお婉堂を訪ねた。正式名称は野中神社で、町の指定史跡ともなっているが、土地の人は昔から敬愛の気持ちを含めて、ここを「お婉堂」と呼んでいる。その一間四方の小さなお堂は、婉が建てたものである。婉は野中家断絶後、先祖の祭りが絶えるので、旧臣古楨氏をたより、土佐山田のこの地を買い、堂を建立して、野中一族の神牌を納め、宝永五（一七〇八）年に祭典を営み、祭田五反を寄進して古楨氏に祭祀を依頼したという（高知県・土佐山田町教育委員会の記述による）。

のどかな田園風景の中に、小さな森に囲まれて野中神社の境内があり、奥まった所にお婉堂がある。その風景を私の至らぬ数首から多少なりとも読み取っていただければ幸いである。

一対の狛犬さんが目印と聞きて探しぬお婉堂への道

狛犬のわれ招くごと向ひみて真直ぐに続く野の中の道

お婉堂いづこと問へば畦道に上りて森を指差しくれぬ

古びたる御堂囲みて小さき森三百年の日々守り来し

そして、ここにはなんとご縁が深いことであろうか、サキクサ特別同人であり、大塚主宰の夫君である大塚雅春氏の歌碑がある。お婉堂の地続きの隣接地に生まれ、育ち、青春を過ごした大塚氏にとって、お婉堂への思いはことのほか深いと思われる。その大塚氏の歌碑の歌。

ふるさとの山田の早苗波うつを見つつ恋ひをり遠つ日のこと

そして、平成九年六月七日、このお婉堂に大原富枝さんの歌碑が建てられた。その歌碑に刻まれた短歌は、先にあげた桂浜の松林で詠んだという一首で、一九三七（昭和十二年）、二十五歳、若き日の短歌である。最後にもう一度紹介して、この稿を終わりにしたい。

ストローの歯にふれて鳴る音涼し松の花粉の白きテープル

◆参考資料

「婉という女・正妻」解説・上田三四二（講談社文庫、一九七二）その他は文中に出典を明記

解説

茂登子さんの「大原富枝と「婉」の足跡を訪ねて、そして短歌のことども」は、サキクサ二十周年記念号に随想として発表されました。

「ちょうど病のあとであった私には病気をくりかえしながらも諦めずに一筋の道を歩み続けていく大原さんの生き方に深い感動を覚え、大変力づけられるものがあつたのである」と茂登子さんは書いていらつしやいます。

それは茂登子さん御自身が御病気を繰り返かえされながら、なおひたすらお仕事に短歌にと励まれ、それを誠心誠意しとげようと努力なさつていらした生き方に重なります。だからこそ大原富枝に共感し、「婉」という女性の生涯にも心ひかれられたのではないでしようか。

心をひかれた人とはまた思いがけない出会いも生じます。大原富枝の短歌との出会いは、茂登子さんが「女性の短歌から見た昭和と戦争」の執筆のための資料を探していらした時ではなかつたかと思ひます。一人の人のいろいろな方面での仕事を見出した時の喜び、茂登子さんにとってこの発見は嬉しいものだったでしよう。御自身短歌を作つていらしたの

で大原富枝により親しみを感じられ、若き日の大原富枝の短歌に心をとめられたことと思
います。

昭和三十年代頃でしたでしょうか。私の読んだ小説の中でとても感銘をうけた作品の一
つに『婉という女』がありました。休みの日には作品の背景となった地を訪ねて日本國中
を旅していた私は、土佐の中村に幸徳秋水の墓を訪ねたあと、野中一家の配流地宿毛まで
いったことがあります。

茂登子さんの随想を拜見して、『婉という女』にお心をひかれその足跡を訪ねられたこ
とを知り、またまた茂登子さんとの不思議な御縁を思いました。いつかそんなことなどを
お話したいと思いつながら、お忙しい茂登子さんとはとりとめのないお喋りをする時間もな
いまま時は過ぎてしまいました。若い時はお互いの仕事や家庭に忙しく、その後はお互い
に病気のためにかけちがって過ぎた時間が惜しまれます。そしてとうとうお茶でもゆつく
り飲んでという時間が永遠に失われてしまったことを、しみじみと悲しく思っております。

坂口 郁記